



Title	『オデュッセイア』第二歌におけるテーレマコスの怒り : $\sigma\kappa\tilde{\eta}\pi\tau\rho o\nu$ の用いられ方について
Author(s)	木和田, 安寿
Citation	文芸学研究. 2020, 23, p. 46-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『オデュッセイア』第二歌におけるテーレマコスの怒り ——σκήπτρον の用いられ方について——

木和田 安寿

はじめに

『オデュッセイア』におけるテーレマコスについて、序盤では「幼稚な子供⁽¹⁾」と求婚者たちは述べており彼らにとってテーレマコスが取るに足らない者としてみなされ、また「彼の命をゼウスが終わらせてほしい、彼が大人になる前に⁽²⁾」とも語り、将来の彼についてはまだしも現在のテーレマコスについては、彼は彼らの蛮行を妨げることのできる人間であるとは思われていないことが示されている。また女神アテーネーによる奮起を促す説得を受けても彼は意気地なく父親のいないわが身の不運を嘆くだけ⁽³⁾であり、オデュッセウスの不在の故に寄る辺なく、求婚者たちに意見を述べることもできず頼りない存在として登場している⁽⁴⁾。また「テーレマコスが会おう人々すべてによって、姿形、すなわち外形が父と似ていることが指摘されている。(中略)英雄としての内実、力量はまだ乏しく、その点では父と全く似ていない。したがって、外形が父と似ていることのみが強調される必要があったであろう⁽⁵⁾」と論じられてもいるように、彼については最初の段階では未熟な少年である点が強調されている。

そして彼が成熟するのはスパルテーでの経験を経てからのことで、イタケーへ帰る途中から彼に同行していたテオクリュメノスがイタケーでの滞在に関する質問に答えたり⁽⁶⁾、彼が宿泊するべき人間へその旨を頼んだりしており⁽⁷⁾、それまで第四歌などで顕著のように同行してくれていたネストールの息子ペイシストラトスが彼を先導していた関係が、ここで逆転を見せている⁽⁸⁾。これ以降も変装していたオデュッセウスから自身の正体を明かされたのちも父親の求婚者殺害の計画に関して意見を述べて修正案を出したり⁽⁹⁾、弓競技の場で乞食に身をやつしたオデュッセウスに弓を渡す際に、「アカイア勢のうちで自身よりも弓に関して強い権限を持つ者はおらず、客人に弓を与えて持ち帰らそうとしたとして誰も自身を妨げられない⁽¹⁰⁾」と述べたりしており、

自身の家に関しての責任を果たそうとし己がオデュッセウスの代役として振舞おうという意識が見てとれる。また弓競技でテーレマコスが弓に弦を張ろうとして三度失敗したが四度目に取りかかろうとした時、オデュッセウスの合図がなければ成功していただろうという状況になっている⁽¹¹⁾ことから、彼がオデュッセウスと身体能力の点でも並び立つほどに成長しているのだということが示されている。

このように、第一歌から第四歌でのテーレマコスは未熟な若者としての側面が強調されて描かれているということは疑いの余地はないだろう。しかし、テーレマコスの英雄としての資質、つまりオデュッセウスの家を継ぐ者としての資質があるということが、この叙事詩において彼が中心となって展開する第一歌から第四歌にかけてまったく語られていないわけではないのである。将来そうなるだろう、という内容であり現状の彼についてではないものの、オレステースのように父と同等の力を持ち父に代わって仇を討つことができることがゼウスによって示唆されている⁽¹²⁾。また彼の振舞いの内にはピュロス、スパルターからの帰国ののちに見せるような、館の主の代役としての義務感や責任感といったものの萌芽も垣間見えるのではないだろうか。

本論文ではテーレマコスが旅に出る以前に家の主としての資格を手にしていたことを確認したうえで、σκῆπτρον βάλε γαίῃ(杖を大地に投げつけた *Od.* 2. 80.)という一節に注目し、『イーリアス』におけるアキッレウスの怒りとの比較を通してテーレマコスの示す怒りの質について考察する。この言い回しは『オデュッセイア』中には他に登場せず、『イーリアス』中では *Il.* 1.245. にのみ存在するものである。この一節に至るまでの『オデュッセイア』冒頭のイタケーにおけるテーレマコスの描写を順に追う形で見ていき、『イーリアス』冒頭でのアキッレウスの描写を比較しながら、ここで示されるテーレマコスの怒りについて考えたい。

1. ホメロスにおける σκῆπτρον

テーレマコスとアキッレウスの描写を比較していく前に、両作中で σκῆπτρον が用いられている箇所を整理し、σκῆπτρον がどのようにして扱われているのか、何を象徴するものであるのかを見ていく。

West によれば σκῆπτρον は権威の象徴であり、集会での発言権を認められた者を示すためのものとして用いられ、そのため共同体の権威も表すものであると考えられることから、伝令使たちが自身の役職を表すことにも使用されていると考えられる⁽¹³⁾。また王が他者に自身の権威を示す杖を一時的に渡す場面も『イーリアス』では見られるものの⁽¹⁴⁾、σκῆπτρον は王や統治者の神からの認可の印でもある。σκηπτοῦχος(杖を持

つ者)というエピテトンが βασιλεύς にのみ用いられること⁽¹⁵⁾や、またこの単語だけで βασιλεύς の代わりに用いられもすること⁽¹⁶⁾からも、σκῆπτρον が王権の象徴として機能していることは明らかである。以下で『イーリアス』『オデュッセイア』中で σκῆπτρον が現れる場面を分類し引用しているが、やはりこのような権威の象徴としての用いられ方が最も多い。

σκῆπτρον は『イーリアス』では二七か所、『オデュッセイア』では九か所で合わせて三六回登場する。これらの使われ方を分類すると、歩行補助に用いられるのが五回、神官の身分を示すものが三回、王あるいは統治者の身分を示すものが一二回、伝令使の身分を示すものが一回、占い師の身分を示すものが一回、発言者を示すものが六回、誓いを示すものが三回、暴力の道具として用いられるのが三回、そして大地に投げつけられるものが二回である。これらは持っていた人間が同じであっても、用途が異なると判断できる場合はそれぞれ別のものとしてカウントしている。また、以下に引用する際、σκῆπτρον には下線を引いている。

σκῆπτρον が歩行補助に用いられるのは、『イーリアス』では第一八歌四一六行、『オデュッセイア』では第一三歌四三七行、第一四歌三一行、第一七歌一九九行、第一八歌一〇三行である。

(前略) ἔλε δὲ σκῆπτρον παχύ, βῆ δὲ θύραζε
χωλεύων (Il. 18. 416-417.)
彼(ヘーパイストス)は太い杖を取り、そして足をひきずって
扉の外へと向かった。

(前略) δῶκε δέ οἱ σκῆπτρον καὶ ἀεικέα πήρην,
πικνὰ ῥωγαλήην (Od. 13. 437-438.)
彼女(女神アテーネー)は彼(オデュッセウス)に杖と粗末で
至るところが破れた革袋を渡した。

οἱ μὲν κεκλήγοντες ἐπέδραμον· αὐτὰρ Ὀδυσσεὺς
ἔξετο κερδοσύνη, σκῆπτρον δέ οἱ ἔκπεσε χειρός. (Od. 14.30-31.)
彼ら(犬たち)は吠えながら駆け寄ってきた。そしてオデュッセウスが
察して座った、そして手から杖を放した。

Εὐμαιος δ' ἄρα οἱ σκῆπτρον θυμαρὲς ἔδωκε. (*Od.* 17. 199.)

エウマイオスは彼(オデュッセウス)に思った通りの杖を渡した。

(前略)σκῆπτρον δέ οἱ ἔμβαλε χεῖρ, (*Od.* 18. 103.)

彼(オデュッセウス)は杖を彼(イロス、物乞い)の手に握らせた、

次に、σκῆπτρον が神官の身分を示すものとして用いられるのは、『イーリアス』のみで第一歌一五行、第一歌二八行、第一歌三七四行である。このうち第一歌一五行と第一歌三七四行は同じ文言である。

στέμματ' ἔχων ἐν χερσὶν ἐκηβόλου Ἀπόλλωνος

χρυσέῳ ἀνὰ σκῆπτρῳ, (*Il.* 1. 14-15., 373-374.)

彼(クリューセース)は金の杖の先に遠矢射るアポッロンの標を手に持って、

μή νύ τοι οὐ χραΐσμη σκῆπτρον καὶ στέμμα θεοῖο· (*Il.* 1. 28.)

もはや杖も標もお前(クリューセース)にとっては決して助けにはならないだろう。

次に、σκῆπτρον が王あるいは統治者の身分を示すものとして用いられるのは、『イーリアス』では第二歌四六行、第二歌一〇一行、第二歌一八六行、第二歌二〇六行、第六歌一五九行、第九歌三八行、第九歌九九行、第九歌一五六行、第九歌二九八行、第一八歌五五七行、『オデュッセイア』では第三歌四一二行、第一一歌五六九行である。このうち第九歌一五六行と第九歌二九八行は同じ文言である。

εἴλετο δὲ σκῆπτρον πατρώϊον ἄρθιτον αἰεὶ

σὺν τῷ ἔβη κατὰ νῆας Ἀχαιῶν χαλκοχιτώνων· (*Il.* 2. 46-47.)

彼(アガ멤noon)は父祖から伝わる永遠に壊れることのない杖を手に取りそれとともに青銅の鎧をまとうアカイア勢の船のもとへと行った。

(前略)ἀνὰ δὲ κρείων Ἀγαμέμνων

ἔστη σκῆπτρον ἔχων τὸ μὲν Ἥφαιστος κάμει τεύχων.

(中略)

αὐτὰρ ὁ αὖτε Θυέστ' Ἀγαμέμνονι λείπε φορῆναι,
πολλῆσιν νήσοισι καὶ Ἄργεϊ παντὶ ἀνάσσειν. (II 2. 100-108.)

この時王アガメムノーンが

ヘーパイストスがつくりあげたその杖を持って立ち上がった。

(中略 ここでその杖はゼウス、ヘルメース、ペロプス、アトレウス、テュエステースに譲られていったものであるという説明がなされている)

そしてテュエステースが再びアガメムノーンに所有することを許した、
多くの島々とアルゴス全土を統治すべく。

αὐτὸς δ' Ἀτρεΐδεω Ἀγαμέμνονος ἀντίος ἐλθὼν
δέξατό οἱ σκῆπτρον πατρώϊον ἄφθιτον αἰεὶ (II 2. 185-186.)

彼(オデュッセウス)自身がアトレウスの子アガメムノーンの面前へ行き、
父祖から伝わる永遠に壊れることのない杖を受け取った。

οὐκ ἀγαθὸν πολυκοιρανίῃ· εἷς κοίρανος ἔστω,
εἷς βασιλεύς, ᾧ δῶκε Κρόνου πάϊς ἀγκυλομήτεω
σκῆπτρόν τ' ἠδὲ θέμιστας, (II 2. 204-206.)

たくさんの統率者がいるのはよいことではない。統率者は一人であれ、
策略に長けたクロノスの子が杖と王権を与えたところの
一人の王であれ、

Ζεὺς γάρ οἱ ὑπὸ σκῆπτρῳ ἐδάμασσε. (II 6. 159.)
というのもゼウスが彼(プロイトス)の杖のもとに支配をもたらしした。

σκῆπτρῳ μὲν τοι δῶκε τετιμῆσθαι περὶ πάντων, (II 9. 38.)
あなたに彼(ゼウス)が杖でもってすべての人々に勝って名誉を授けるべく与えた、

(前略)τοι Ζεὺς ἐγγυάλιξε
σκῆπτρόν τ' ἠδὲ θέμιστας, (II 9. 99.)
あなたの手にゼウスが
杖と王権を握らせた、

οἱ κέ ἐ δωτίνησι θεὸν ὥς τιμήσουσι

καὶ οἱ ὑπὸ σκήπτρῳ λιπαρὰς τελέουσι θέμιστας. (Il 9. 155-156., 297-298.)

彼ら(領地の人々)はあなたを神のように贈り物でもって敬って
そして彼らは杖のもとで喜ばしい法を全うするだろう。

(前略) βασιλεὺς δ' ἐν τοῖσι σιωπῇ

σκήπτρον ἔχων ἐσπῆκει ἐπ' ὄγμου γηθόσυνος κῆρ. (Il 18. 556-557.)

王は彼ら(収獲している人々)に交じって黙ったまま
杖を持って畦溝のそばに心でもって喜んで立っている。

Νέστωρ αὖ τὸτ' ἐφῖξε Γερήνιος, οὖρος Ἀχαιῶν,

σκήπτρον ἔχων. (Od. 3. 411-412.)

この時グレーニアのネストールが、アカイア勢の守護者が、
杖を持って座っていた。

ἔνθ' ἦ τοι Μίνωα ἴδον, Διὸς ἀγλαὸν υἱόν,

χρύσειον σκήπτρον ἔχοντα, (Od. 11. 568-569.)

そこでなんと私はミーノースが、ゼウスの輝かしい息子が、
金の杖を持っているのを見た、

次に、σκήπτρον が伝令使の身分を示すものとして用いられるのは、『イーリアス』
のみで第七歌二七七行である。

μέσσω δ' ἀμφοτέρων σκήπτρα σχέθον, εἵπε τε μῦθον

κῆρυξ Ἰδαῖος πεπνυμένα μῆδεα εἰδώς (Il 7. 277-278.)

彼ら(伝令使たち)は二人それぞれ(大アイアースとヘクトール)の間に杖を持った、
そして伝令使の賢明なる明知のイーダイオスが言葉でもって話しかけた。

次に、σκήπτρον が占い師の身分を示すものとして用いられるのは、『オデュッセイ
ア』のみで第一—歌九一行である。

(前略) ἤλθε δ' ἐπὶ ψυχῇ Θηβαίου Τειρεσίᾳο

χρύσειον σκῆπτρον ἔχων, (*Od.* 11. 91.)

テーバイのテイレシアースの魂が金の杖を持って
近づいて来た、

次に、σκῆπτρον が発言者を示すものとして用いられるのは、『イーリアス』では第二歌二七九行、第三歌二一八行、第一〇歌三二八行、第一八歌五〇五行、第二三歌五六八行、『オデュッセイア』では第二歌三七行である。

ὥς φάσαν ἢ πληθὺς· ἀνὰ δ' ὁ πτολίπορθος Ὀδυσσεύς

ἔστη σκῆπτρον ἔχων· (中略)

ὁ σφιν ἐν φρονέων ἀγορήσατο καὶ μετέειπεν· (*Il.* 2. 278-283.)

このように群衆は語り合った。そして都市を攻め落とすオデュッセウスが
杖を手にして立ち上がった。(中略)

彼は彼らに向って善意を込めて語りかけた。

ἀλλ' ὅτε δὴ Τρώεσσιν ἐν ἀγρομένοισιν ἔμειχθεν

(中略)

σκῆπτρον δ' οὐτ' ὀπίσω οὔτε προπρηνὲς ἐνώμα,

ἀλλ' ἀστεμφὲς ἔχεσκεν αἶδρεῖ φωτὶ ἐοικώς· (*Il.* 3. 210-219.)

彼ら(メネラーオスとオデュッセウス)がトロイエーの人々と一緒に話した時
(中略)

彼(オデュッセウス)は杖を後ろにも前にも揺らさず、

どう扱ったらいいか分かっていない者のようにちっとも動かさなかった。

ὥς φάθ', ὁ δ' ἐν χερσὶ σκῆπτρον λάβε καὶ οἱ ὅμοοσεν· (*Il.* 10. 318.)

彼(ドローン)がこう言うと、彼(ヘクトール)が杖を手を持ち彼に誓った。

(前略)οἱ δὲ γέροντες

εἴατ' ἐπὶ ξεστοῖσι λίθοις ἱερῷ ἐνὶ κύκλῳ,

σκῆπτρα δὲ κηρύκων ἐν χέρσ' ἔχον ἠεροφώνων· (*Il.* 18. 503-505.)

老人たちは

神聖な円形の場で磨かれた石の上に座り、

そして声の通る伝令使から杖を受け取って手に持っていた。

(前略) ἐν δ' ἄρα κῆρυξ
χειρὶ σκῆπτρον ἔθηκε, σιωπῆσαί τε κέλευσεν
Ἀργείους· ὁ δ' ἔπειτα μετηύδα ισόθεος φῶς (Il. 23. 568.)
伝令使が
(メネラーオスの)手に杖を渡し、彼はアルゴス勢に静かにするよう
命じた。そして神のごとき男が言葉でもって語った。

(中略) σκῆπτρον δέ οἱ ἐμβαλε χειρὶ
κῆρυξ Πεισὶγῶρ πεπνυμένα μῆδεα εἰδώς (Od. 2. 37-38.)
彼(テーレマコス)の手に杖を渡した、
思慮深い伝令使のペイセーノールが。

次に、σκῆπτρον が誓いを示すものとして用いられるのは、『イーリアス』のみで第一歌二三四行、第七歌四一二行、第一〇歌三二一行である。

ἀλλ' ἔκ τοι ἐρέω καὶ ἐπὶ μέγαν ὄρκον ὁμοῦμαι·
ναὶ μὰ τὸδε σκῆπτρον, (Il. 1. 233-234.)
さあ私(アキッレウス)はあなたに宣言し重大な誓いをしよう。
この杖にかけて、

ὄρκια δὲ Ζεὺς ἴστω ἐρίγδουπος πόσις Ἥρης·
ὥς εἰπὼν τὸ σκῆπτρον ἀνέσχεθε πᾶσι θεοῖσιν,
ἄγορρον δ' Ἰδᾶϊος ἔβη προτὶ Ἴλιον ἱρήν. (Il. 7. 412-413.)
そしてヘーレーの夫であり雷を轟かせるゼウスは誓いを知らるう」
彼(アガ멤noon)はこのように言って杖をすべての神々に向かって掲げ、
そしてイーダイオスは聖なるイーリオスに戻っていった。

ἀλλ' ἄγε μοι τὸ σκῆπτρον ἀνάσχεο, καὶ μοι ὁμοσσον. (Il. 10. 328.)
さあ、あなた(ヘクトール)は私(ドローン)に杖を掲げよ、そして私に誓ってくれ。

次に、σκῆπτρον が暴力の道具として用いられるのは、『イーリアス』のみで第二歌一九九行、第二歌二六五行、第二歌二六八行である。

ὄν δ' αὖ δῆμον τ' ἄνδρα ἴδοι βοόωντά τ' ἐφεύροι,
τὸν σκῆπτρῳ ἐλάσασκεν ὀμοκλήσασκέ τε μύθῳ· (Il. 2. 198-199.)
彼(オデュッセウス)は兵士や喚いている者を見ると、
そのたびにその者を杖でもって殴り、言葉でもって呼びかけた。

ὥς ἄρ' ἔφη, σκῆπτρῳ δὲ μετάρρενον ἡδὲ καὶ ὦμῳ
πλήξεν· ὃ δ' ἰδὼθῆι, θαλερὸν δέ οἱ ἔκπεσε δάκρυ·
σμηδῖς δ' αἱματόεσσα μεταρρένου ἐξυπανέστη
σκῆπτρου ὑπο χρυσέου· (Il. 2. 265-268.)
彼(オデュッセウス)はこのように言うと、杖でもって背と両肩を
殴りつけた。そして彼(テルシーテース)は身を縮め、大粒の涙を流した。
そしてみみず腫れが背から腫れ始めていた、
金の杖によって。

最後に、σκῆπτρον が大地に投げつけられたのは、『イーリアス』のみで第一歌二四五行、第二歌八〇行である。

ὥς φάτο Πηλεΐδης, ποτὶ δὲ σκῆπτρον βάλε γαίῃ
χρυσείοις ἥλοισι πεπαρμένον, ἔζετο δ' αὐτός· (Il. 1. 245-246.)
ペーレウスの子はこう言って、そして金の銚を打った杖を
大地に投げた、そして彼は座った。

ὥς φάτο χρώμενος, ποτὶ δὲ σκῆπτρον βάλε γαίῃ
δάκρυ' ἀναπρήσας· οἶκτος δ' ἔλε λαὸν ἅπαντα. (Od. 2. 80-81.)
彼(テーレマコス)はこのように怒って言い、涙を流しながら
杖を大地に投げつけた。そして憐れみが全ての人を捕えた。

このように σκῆπτρον の用いられ方を見ていくと、アキッレウスとテーレマコスが

σκήπτρον を投げ捨てるのは単純な動的行為であるという説明はふさわしくないように思われる。

σκήπτρον は歩行を補助する道具としても用いられているが、『イーリアス』『オデュッセイア』においては主に王権や発言者を示したり神々への近さを表したりするものである。神官は神々へ祈りの言葉を伝えることができる者⁽¹⁷⁾として登場し、占い師は神意を伝えたり解釈したりする者⁽¹⁸⁾として登場しているが、その彼らが σκήπτρον を有しているのである。神々へ誓う際にも σκήπτρον にかけて行っていることから、σκήπτρον にある種の宗教性も加味されていることがわかる。『イーリアス』第二歌でオデュッセウスがアガメムノーンから貸与された σκήπτρον でテルシーテースを殴るのも、アガメムノーンを批判し兵らを煽って帰国を促すというアガメムノーンの意図に反する行為をしているのを咎め、彼の代理として振舞っているためのことである。アガメムノーンの権威の代行であることを強調するために、オデュッセウスはテルシーテースを杖でもって殴打しているのである。

このように σκήπτρον は様々な面で特別な意味合いを持たせられている。テーレマコスとアキッレウスの行動は感情の高ぶりを表すだけではなく、この権威と神聖さを示している σκήπτρον を投げ捨てるという、杖を蔑ろにしていることを示唆する行為を行うことで緊張感を生み、非常に鮮烈な印象を与える効果を持っている。テーレマコスが涙を流しながら怒って杖を投げることによって群衆は憐れみを覚え⁽¹⁹⁾、アキッレウスの怒りはネストールによるとりなしを生む⁽²⁰⁾のである。この点で、この二つの場面は特殊であるといえる。

2. 女神アテーナーとの対話

2-1. テーレマコスの場合

この章では、テーレマコスとアキッレウスがそれぞれ女神アテーナーと話すまでの筋道を整理し、彼らの怒りや行動について見ていく。

テーレマコスが杖を投げつけるという行動に出たのは、イタケーの人々を呼んで集会を開いた中でのことである。彼が集会を開くに至るまでに女神アテーナーからの励ましと勧めが繰り返され、また集会で意見を述べる以前にもテーレマコスが求婚者たちに対して自身の意向を先んじて語る場面がある。

まず、第一歌でオリュンポスにて女神アテーナーがテーレマコスに対して「求婚者たち全員に対してははっきりと語るができるよう、彼を励まし心に怒りを据えるべくイタケーに向かうこと、また彼自身が父オデュッセウスの帰国について尋ねにピュ

ロスとスパルターを巡るよう⁽²¹⁾」に勧めることについてゼウスに述べ、イタケーへと向かった。

女神アテーネが館にやって来た時、テーレマコス求婚者たちによって好き勝手に食い荒らされている自身の館にいて、父親が帰って来てその優れた武勇でもって求婚者たちを懲らしめてくれないかと考えており⁽²²⁾、ここではテーレマコス自身が彼らに対して何か行動をとろうというつもりがないことが示されている。この彼の意気地のない態度はこのあとも続いており、女神アテーネに自身の置かれた境遇や現在の館の状況について述べる際、求婚者たちが館の財産をなんら償うことなく食い潰しており、それを阻止すべき館の主人は死んでしまっているのだと述べ、「もし彼(オデュッセウス)がイタケーへ帰りつくのを求婚者たちが見ることがあったら、全ての人は金や衣服がたくさんあることよりも、足が速くあったらいいのにと祈ることだろう⁽²³⁾」と言ってオデュッセウスによる求婚者たちの殺害を望み、また彼が生きているという報告が誰かからされたとしても慰めにはならず館の主人はもうすでに死んでしまっているのだ⁽²⁴⁾と語っている。このように彼には自身の力を尽くして家や財産を守る気力が全くなく、それが可能なのは父親だけであるもののその彼が館に帰ってくることはもはやないのだと考えている。

このあとでメンテースに扮したアテーネはテーレマコスに対して、オデュッセウスが帰国するだろうという噂を耳にしたこと、まだ存命で神意の故にどこかの孤島に取り残されて、野蛮で冷酷な人々が引き留めているのではないかということを語り⁽²⁵⁾、そして彼がもうまもなく帰国して現れるだろうということを予言するのである⁽²⁶⁾。しかしこの励ましにもテーレマコスは取りあわず、彼の姿形がオデュッセウスにそっくりだという言葉にも「母は私が彼の子だといっているが、私にはわからない。誰もその人自身の家系について知るはずがないのだから⁽²⁷⁾」と返して、自身の生まれについて疑念を抱いているかのように述べている。『イーリアス』『オデュッセイア』の英雄たちにとって、父親はこの上なく多大な影響を及ぼす者であり⁽²⁸⁾、多くの英雄たちが自身の父祖が誰でありどのようなことをなしてきたのかを挙げて自身の身の上を明らかにする場面があることから⁽²⁹⁾それは明らかである。しかしテーレマコスはここで彼らと半ば相反する発言をしており、彼にとって父親の印象というものが希薄で不明瞭なものであるゆえに求婚者たちへの復讐を果たそうという義務感を抱くことができないでいる⁽³⁰⁾。彼自身は父親オデュッセウスと実際に接する経験を踏まえて知っているわけではなく、ただ風聞によってのみ父親について知っているのだということをここで示している⁽³¹⁾。

オデュッセウスはトロイエーの戦場で殺されたのでも仲間の英雄たちの間で死んだわけでもなく、戦争のちに突然消えてしまっている。このため、アカイア勢によって墓をつくられたわけでもなく、テーレマコス自身が名誉を得たわけでもないという状況になっている⁽³²⁾。その上、父が名誉をもたらずことなく死んでしまったこの状況で、テーレマコスはオデュッセウスについてだけ嘆き悲しむことはもはやできず、その一方で求婚者たちは家を食い潰し母に求婚しているのである。テーレマコスは目の前の苦境を乗り越える手立てを見出せずにいるのに加え、彼らが館の財産を食い潰した後は彼自身を殺してしまうだろうという予測も立てている⁽³³⁾。実際に第四歌六六九行以下で求婚者たちが実際にそのように計画していることが後に明らかになるのだが、彼が自身と館内の状況について自身の父親が死んでしまい救いの手はないという前提に立ったうえで考え、悲観的で無気力な発言を繰り返しているということがうかがえる。

このように二度自身の境遇をテーレマコスが嘆いたあとの第一歌二七四行以下、オデュッセウスの館の内で開かれている宴の席でタポスの王メンテースに扮する女神アテーネーは、上述した彼女の考えを具体的にした「母ペーネロペイアの求婚者たちへ、自身の領地へ帰ること」、さらに「母へ、再婚したいなら自分の父の屋敷へと戻りたくさんの嫁資と共に嫁ぐこと」を命じるように励まし、また彼自身が父オデュッセウスの消息を尋ねにピュロスとスパルターを巡ることを勧めている。アテーネーは彼の消息について、生きていて帰還するだろうと聞けたなら一年は今の状況が続いたとしても耐えられるように、また死んでしまったと聞いたとしても葬儀を盛大に執り行って母を再婚させるようにと提案している。そしてここでさらに、これらの課題をテーレマコスが果たした後、策略でもってかあるいは正面からか、求婚者たちをどのように殺すのかを考えるようにアテーネーは勧める。この館の内で平和的な解決を見ることはないということがここで明示されており、これはアテーネーが先にオリュンポス山でゼウスに述べたテーレマコスへの提案には見られなかった事柄である。しかしこの「亡くなった父親の代わりに家を荒らす者を討つ」という構図はオレステースがなしたこととしてオリュンポス山で他ならぬゼウスによって既に語られ、安村によれば「ゼウスの言葉の強調点はむしろ、オレステースになぞらえたテーレマコスの成長であると考えられる⁽³⁴⁾」ことから、ここでオレステースの果たした功績はテーレマコスが将来果たすであろう求婚者たちの殺戮と重ね合わせてとらえることができる。このようにテーレマコスが館内の平和と秩序を取り戻すことは神々(特にゼウスとアテーネー)からは期待されている事柄だと考えていいだろう。

2-2. アキレウスの場合

『イーリアス』でのアキッレウスは、アテーネーによって励まされ行動を促されたテーレマコスとは対照的にその行動を阻止されている。アキッレウスは第一歌でアガ멤noonと口論した際、アガ멤noonが、自身の取り分であるクリューセーイスを手放す代わりにアカイア勢の誰かからその人物の取り分を奪うつもりであると語っている。この時にアキッレウスは眉の下から睨みつけて語っている。この表現は強い不快感と非難を意味するものであり、彼はここで激しい怒りを露わにし、弁舌巧みに発言している⁽³⁵⁾。アガ멤noonに対して「なんという恥知らず、ずる賢い人よ⁽³⁶⁾」「なんとも恥知らずな人よ⁽³⁷⁾」「犬の眼をした人よ⁽³⁸⁾」と呼びかけ、彼に対する怒りが彼の厚顔無恥さ、欲深さからくるものであることを示している。またその発言でも、アカイア勢がトロイエーへ出征したのは彼ら個人がそれぞれにトロイエーの人々から何か被害をこうむったからではなく、メネラーオスとアガ멤noonがトロイエーから償いを勝ち取ることができるようにするためのことであると述べ、自身のためでなくここで傲慢なふるまいを見せるアガ멤noonの利益のために戦っているのだということを指摘している。これを受けてアガ멤noonはクリューセーイスを父親のもとへ返す代わりに、アキッレウスから彼の取り分であるブリーセーイスを奪うということを宣言する。ブリーセーイスはアキッレウスが自身の戦場での働きにおいて勝ち取った取り分であり、彼の誉れや身分を示すものであり、また手放しがたいほどに愛する女性でもある。この彼女を奪うという行為はアガ멤noonの取りうる行為の中で最悪なものであり、英雄たちの価値基準を示すシステムを打ち壊したのである⁽³⁹⁾。このために、アガ멤noonがアカイア勢の誰かからその取り分を奪うということは、彼ら二人のために尽力しているアカイア勢の名誉を傷つけ、その出征理由を脅かしさえするものである。パリスによってヘレネーを略奪されたメネラーオスのためのこの戦争で、パリスと同じことをアガ멤noonはアカイア勢に対して行おうというのである⁽⁴⁰⁾。自身の取り分を勝ち取るために多くの苦しみに耐え、正当な権利としてその取り分を得たという戦場での働きをアガ멤noonは踏みにじり、その対象者の名誉を傷つける行動をとっている。

そしてアキッレウスはアガ멤noonの思い上がりで傲慢さから彼を殺すか怒りを抑えようかと考えるほどに激高し、鞘から剣を引き抜きかけてしまう。この時にアテーネーが現れて彼を押止めることになるが、ここでアテーネーにアキッレウスはアガ멤noonについて「彼はその思い上がりによってすぐにでも命を落とすだろう⁽⁴¹⁾」と述べている。ここでのアガ멤noonの思い上がり、傲慢といったものは、嘆

願者でありアポローンの神官であるクリューセースをアガメムノーンが侮辱したときに表出するものとは異なり、神への過ちでなく英雄同士の争いから生まれるものとなり⁽⁴²⁾、アガメムノーンからの侮辱がアキッレウス名誉を傷つけていることに焦点が当てられている。

これに対してアテーナーは彼が怒りを抑えてアガメムノーンにこれからどうなるのかを伝えるように告げ、それは達成され彼には今取り上げられる取り分の三倍もの褒美が後になって与えられるだろうので耐えるように⁽⁴³⁾と説得している。それを了承し、鞘に剣を戻してアキッレウスはアガメムノーンに対して今後の彼の意向を述べる。この時、彼は再度アガメムノーンのことを「酒に酔い、犬の目を持ち鹿の心を持つ人よ⁽⁴⁴⁾」と呼び、彼が恥知らずな行いをしているのだということを何度も指摘する。さらにアガメムノーンが戦場で決して意欲的に振舞うことはなく、むしろ取り分の分配を取り上げ共有の財を食い潰す存在であるのだと非難している⁽⁴⁵⁾。そして彼はその手に持つ杖にかけて、これ以降の出陣は行わず、アキッレウスを侮辱し軽んじたことをアガメムノーンは後悔しながら、多くのアカイア勢が死んでいくのだと誓う⁽⁴⁶⁾。この集会の後でアキッレウスは母であり女神であるテティスに、ゼウスによってアカイア勢が劣勢に追い込まれアキッレウスを思い出すようにならないかと助力を乞うが、ここから『イーリアス』中で語られることになるアカイア勢の苦境はアキッレウスの怒りからもたらされたものであるということは、その怒りが彼の誓いの通り「アカイア勢に数多の苦難を与え、英雄の多くの高貴な魂を冥府へ投げ込み、彼らを犬や鳥の餌食となした⁽⁴⁷⁾」もので「最初に人々の王であるアトレウスの子と神のごときアキッレウスが争って仲違いをしたときから⁽⁴⁸⁾」怒りが始まるのだと語られていることから明らかである。つまり、この怒りはアポローンからの疫病のように神からアカイア勢へ怒りの結果としてもたらされる苦難ではなく、テティスのアキッレウスへの献身からゼウスの意向を引き出したものであり⁽⁴⁹⁾、アキッレウスの怒りに起因して誘発されたものなのである。

このように、テーレマコスが求婚者たちの横暴によってその気力を奪われていたのと正反対の、はじめから怒りに満ち、ある意味では気力の溢れた人間としてアキッレウスはアガメムノーンと相対しており、この点において両者は異なった存在として描かれている。

しかしながら、『オデュッセイア』のここでのテーレマコスとメンテースの語らいと『イーリアス』におけるアキッレウスとアガメムノーンの口論は、その内容については全く異なるものの、メンテースからの二度の励ましを受けて奮起するテーレマコス、

アガメムノーンから二度の罵倒を受けて彼を殺そうと思うほどに激怒するアキッレウスという展開上の共通点が見受けられる。テーレマコスにはメンテースから具体的な今後の彼の身の振り方についての計画を授けられ、アキッレウスは女神アテーネーからアガメムノーンを殺害することを止められ今後彼のとらうとする行動を伝えるように勧められる。どちらの場合もアテーネーの介入によって彼らは耐えがたい現状に対して思い悩む心の内を一つの意向にまとめ、敵対している者らに自身の考えを宣言することになる。

3. 屋敷内での求婚者たちとの対話

アテーネーは怒りと気概をテーレマコスの胸に据え、以前よりも父親への思いを募らせてその場を去った。そして彼は求婚者たちのところへ向かい、彼らが宴を楽しんでいるところにやってくる。ここでは楽人のペーミオスがアカイア勢の帰国について物語っており、ペーネロペイアがそれを聞いてオデュッセウスのことを思い出して嘆き、演奏をやめるようにと頼む。しかしテーレマコスはそれを遮って母に機織りと糸紡ぎの仕事、侍女たちへの仕事の割り振りをするようにと勧め彼女を自身の部屋へと返す。このテーレマコスの発言は『イーリアス』第六歌四九〇行以下でヘクトールがアンドロマケーに対して述べた言葉とほとんど同じである。家の全てを取り仕切れ⁽⁵⁰⁾とオデュッセウスに頼まれていたペーネロペイアに対してテーレマコスは、ヘクトールがしたように、館の主としての振舞いを示している。これはペーネロペイアにとっては驚嘆する出来事であって⁽⁵¹⁾、テーレマコスの変容ぶりがここでも示されている。

そして求婚者たちに対し第一歌三六八行以下で、翌日の朝から広場で集会を開き、その場で「彼らがそれぞれの屋敷へ帰り、各自が家財を費やして宴を開くよう命じる⁽⁵²⁾」つもりであることを述べる。そしてテーレマコスが償いを受け取ることもなく彼らが死んでしまったらいいと続け、この時求婚者たちは全員、テーレマコスははっきりとこのように述べたので唇を噛んで驚嘆していた⁽⁵³⁾。三八一行の ὁδὲς ἐν χεῖλεσσι φόνους は他に第一八歌四一〇行と第二〇歌二六八行でまったく同じ使われ方をしている。これは求婚者たちの怒りの程度を示す大変鮮烈な表現であり⁽⁵⁴⁾、彼らが我が物顔で屋敷内で楽しんでいることを今まで止めずにいたテーレマコスから強く非難されたことに腹を立てているのである。これは求婚者のうちの一人であるアンティノオスがテーレマコスに対して「神々がまさに今大胆不敵にも声高に語るように教えているのだな⁽⁵⁵⁾」と述べていることから明らかである⁽⁵⁶⁾。そしてアンティノオスは続けて、テーレマコスがオデュッセウスの息子ではあるものの、イタケーの主とならなければ

いいとテーレマコスに挑発するが、テーレマコスはイタケーとその周辺諸島に住む誰かがオデュッセウスが死んだのちに支配するだろうと答えるが、彼は自身の館と奴隷たちの主となるのだと言いきっている。これまで屋敷を継ぐことやオデュッセウスの代役として館の内で振舞うことを示してきたことのなかったテーレマコスが、ここでアテーネーから与えられた怒りと気概をきっかけに、求婚者たちに立ち向かい、彼らと対等に対話し館の安寧を守ろうという、彼が『オデュッセイア』中では主に旅から帰って来てから以降に見せる姿勢をここで打ち出しつつあるのである。これまで無気力で父親への思慕の念が希薄であったテーレマコスが求婚者たちに挑むために必要であるものが、これらの感情であったことが、これまでの、そしてここでの彼の態度からもこのアテーネーの行動からも読み取れる。

そしてこのあとテーレマコスは求婚者たちに、オデュッセウスが帰国することではなく、彼がどのように帰ってくるかとそれについての占いは気に留めるものではない⁽⁵⁷⁾と述べるが、メンテースに扮したアテーネーが先に告げたオデュッセウスの生存やその帰国は、実は彼が女神であったのだということをテーレマコスが理解していたため、彼が三度告げたオデュッセウスの生存が真実であるということは彼にとっては明らかな事実であり希望を抱かせる励ましとなっている⁽⁵⁸⁾。ここでテーレマコスが求婚者たちにオデュッセウスが死んでしまったのだと偽って伝えたのは、オデュッセウスがパイエーケース人の島やイタケーで行っていた、自身の素姓をひた隠し、目的達成のために周囲の人々に意向を悟られないように振舞う能力をテーレマコスが継承しているということの証である⁽⁵⁹⁾。その後テーレマコスは夜になって寝台に入るが、一晩中アテーネーが語った旅のことを考えている。オデュッセウスと共にトロイエーで戦った者たちの目を通して彼のことを知るということはテーレマコスの成長や心理的な発展のための手段である⁽⁶⁰⁾。旅のことを宴の段階では求婚者たちにはまだ伝えていなかったが、彼が実行する気がなかったわけではないことがここでもはっきりと示されている。

『イーリアス』ではアキッレウスがアガメムノーンに対して意見を述べる際、彼は尋常ならざるほどに怒りを示してすぐに反論している。これは、『イーリアス』第四歌でディオメーデースがアキッレウスのように、アガメムノーンから戦場の前線に立たず尻込みする臆病者であると不当な評価を他の者らの前で下された際⁽⁶¹⁾に、すぐには言い返さなかったが第九歌三二行以下でこれに反論し、その上でトロイエーから退くことはせず、他のアカイア勢が帰国し彼と彼が率いてきた者だけになってしまっても戦い続けるつもりであると主張した場面と比較される⁽⁶²⁾。この反論でディオメーデー

スは落ち着いた調子ではっきりと反論しているが、アキッレウスはアガメムノーンの横柄であいまいな言動を彼と同じようには取り扱うことができなかった。これは彼が怒りを捨てることに納得した「年長の英雄」のように振舞えない人物であるということを示している⁽⁶³⁾。アキッレウスのここでの怒りはテーレマコスの示すものと内容としては同等であり、その質や表現の激しさには差異が大きく見られるものの、自身の正当な権利があつて所有しあるいは引き継がれるべきものを他者によって理不尽に奪われることへの怒りである。アテーネーによって与えられたものではあるものの、この怒りがテーレマコスをそれまで行ふことのなかった求婚者への敵対意識の表明や母への命令などを導き出し、彼に館の主の代役としての意識を芽生えさせているのではないだろうか。

4. 集会での演説

翌日、テーレマコスは求婚者たちと敵対する勇気を持ってイタケーの人々を呼び集会を開いた。彼は権威を示し集会では話者を示す杖⁽⁶⁴⁾を手に、今自分の身に振りかかっている二つの禍について語り、父親を失ったことと母親に求婚している者たちが毎日館の財産を食い荒らしていることだと説明する。オデュッセウスのように家の破滅を防ぐことができる主もおらず身を守ることができないでいるということを訴えるが、彼は「自身に力が備わっているのなら、必ずやこの禍を防ぐことができるだろう⁽⁶⁵⁾」と語り、今すぐには求婚者たちを排除することはできないが、その意欲はあることがうかがえる。第一歌でアテーネーから吹き込まれた怒りと気概が持続しており、それまでの彼と精神的な面で異なっている様子がこの時点で見られるのであり、これは彼が帰国後に示す求婚者たちへの強い姿勢⁽⁶⁶⁾を示す兆しととらえることができるだろう。

続けて彼は、もはや自身の家は滅びてしまうのであり、求婚者たちには償いを求め正当な返還がなされるまで要求し続けることを宣言して⁽⁶⁷⁾涙を溢れさせながら杖を投げ捨てる⁽⁶⁸⁾。それまで無気力で取るに足らない、頼りない青年として描かれていたテーレマコスがこの場で自身の家の窮状を包み隠さずさらけ出し、求婚者たちの非情な行いを訴えて、杖を大地に投げつけ涙をほとばしらせている様は、それまでの印象を覆しはしないまでもいささかの転換を引き起こすであろう。先にも触れたがこの訴えの中で彼は自身に力があるのならば家を守りたいと語っている。これは特にメンテースに扮したアテーネーが彼のもとへやって来るまでの彼の言動を踏まえるのならば、考えが変化したことの表れだといつていいのではないだろうか。女神アテーネーから

の励ましや彼女から勧められた旅への計画から、彼が『オデュッセイア』の後半で見せるようになる己がオデュッセウスの代役として振舞おうという意識がここで大きく表れているように思われる。

『イーリアス』においてアキッレウスが杖を大地に投げつけるのは彼の不満の表れであり、それはまた彼の誓いの劇的な確証である⁽⁶⁹⁾。彼が杖を投げつけたのはアガ멤ノンとの口論に端を発する怒りが最高潮に達したときであり、アキッレウスの戦争への長期にわたる不参加を導き出すその怒りがここから発展していくその契機である⁽⁷⁰⁾という点で印象的な場面である。

テーレマコスは一アキッレウスと同じく、求婚者たちから受けた仕打ちへの不満をここで大きく表現し、それとともにこれまでに示されていた、自身のあり様への考え方の変化が彼に杖を大地に投げさせた。テーレマコスはここで館の主の代役としての意識を持って振舞い、そして彼がピュロス、スパルターから帰国したのちに見せる父と同等の力量を身につけ、父に代わって仇を討つことのできる英雄像⁽⁷¹⁾という面を第二歌のこの箇所でも発揮していると考えられる。

おわりに

今回はテーレマコスとアキッレウスが大地に杖を投げつけるに至るまでの怒りと気概の動きや、それに伴う各種の発言について比較した。彼らの描写は過程において厳密な対応を見せているわけでは必ずしもないものの、テーレマコスが第一歌から第二歌にかけて示す感情や行動に関しては一定の近似を見出すことができる。

『オデュッセイア』冒頭のテーレマコスが無気力で頼りない青年として描かれているということ自体は否定することはできないものの、その中でも彼が『オデュッセイア』後半で示すことになる、館の主の代役としての責任感やそれに適した振舞いをしようという気概は、第一歌の随所に見受けられるものでもある。テーレマコスはピュロス、スパルターでの旅を通して劇的に変化・成長するわけではなく、その前から成長の萌芽が見て取れるものとなっている。

杖を投げ捨てるという行為は単純な怒りの表明というだけの行為ではなく、杖の示す権威や神聖さといったもののある種蔑ろにする行為であり、それゆえにこの場面は鮮烈な印象を与え緊張感を生みだしている。

参考文献

Allen, Thomas W. (Ed.), *Iliad I-XII*, Oxford, Third edition, 1920.

Allen, Thomas W. (Ed.), *Odyssey I-XII*, Oxford, Second edition, 1917.

ホメロス、松平千秋訳、『イリアス 上』、岩波書店、1992 年。

ホメロス、松平千秋訳、『オデュッセイア 上』、岩波書店、1994 年。

De Jong, I., *A narratological commentary on the Odyssey*, Cambridge, 2001.

Heubeck, A., West S., Hainsworth, J. B., *A Commentary on Homer's Odyssey v.I*, Oxford, 1988.

Russo, J., Fernandez-Galiano, M., and Heubeck, A., *A Commentary on Homer's Odyssey v.III*, Oxford, 1992.

Homer ; with an introduction, translation and commentary by Jones, P., *Odyssey 1&2*, Warminster, 1991.

Kirk, G., *The Iliad: A Commentary v.I*, Cambridge, 1985.

Griffin, J., *Homer on life and death*, Oxford, 1980.

Jones, P., "The Kleos of Telemachus: Odyssey 1.95", in *American Journal of Philology* 109, p. 496-506, 1988.

Kirk, G., *The Songs of Homer*, Cambridge, 1962.

Millar, C., & Carmichael, J., "The Growth of Telemachus", in *Greece and Rome 1(2)*, p.58-64, 1954.

Sale, W., "Achilles and Heroic Values", in *A Journal of Humanities and the Classics* 2(3), p.86-100, 1963.

Usener, K., *Beobachtungen zum Verhältnis der Odyssee zur Ilias*, Tübingen, 1990.

岡道男、「『オデュッセイア』におけるテーレマコス」、『西洋古典学研究』13、p. 33-50、1965 年。

岡道男、『ホメロスにおける伝統の継承と創造』、創文社、1988 年。

松本仁助、「テーレマコスの「奮起」 α 319~444」、『人文学』101、p.1-26、1968 年。

安村典子、「『オデュッセイア』21 巻の弓競技におけるテーレマコス」、『西洋古典学研究』55、p.24-37、2007 年。

註

- (1) *Od.* 4. 665. νέος πάϊς
- (2) *Od.* 4. 667f. (前略) ὧλλά οἱ αὐτῷ/Ζεὺς ὀλέσσειε βίην, πρὶν ἥβης μέτρον ἰκέσθαι.
- (3) 松本、1968、p.11。 *Od.* 1. 214ff.
- (4) Miller & Carmichael, 1954, p.58.
- (5) 安村、2007、p.26。
- (6) *Od.* 15. 512ff.
- (7) *Od.* 15. 540ff.
- (8) Miller & Carmichael, 1954, p.61.
- (9) *Od.* 16. 308ff.
- (10) *Od.* 21. 348f.
- (11) 安村、2007、p.27。 *Od.* 21. 125-129.
- (12) 安村、2007、p.26。
- (13) West, 1988, p.131. *Od.* 2. 37.
- (14) 『イーリアス』第二歌一八五行以下でアガメムノーンが父祖伝来の杖をオデュッセウスに渡し、帰国しようとしているアカイア勢を引きとめる権限を与えている。
- (15) 『イーリアス』では第一歌二七九行、第二歌八六行、『オデュッセイア』では第二歌二三一行、第四歌六四行、第五歌九行、第八歌四一行で使われている。
- (16) 『イーリアス』では第一四歌九三行、『オデュッセイア』では第八歌四七行で使われている。
- (17) *Il.* 1. 37ff.
- (18) *Od.* 11. 139ff.
- (19) *Od.* 2. 81.
- (20) *Il.* 1. 247ff.
- (21) *Od.* 1. 88ff.
- (22) *Od.* 1. 115ff.
- (23) *Od.* 1. 163ff.
- (24) *Od.* 1. 159ff.
- (25) *Od.* 1. 194ff.
- (26) *Od.* 1. 201ff.
- (27) *Od.* 1. 215f.

- (28) Jones, 1991, p.120, *Od.* 1. 215-220.
- (29) 例えば『イーリアス』では、第六歌一四五行から二一一行でグラウコスが祖父のベッレロポンテスの行った業績と父親ヒッポロコスから受けた激励を語り、ディオメデースは二二三行から二三一行で祖父のオイネウスがベッレロポンテースとの友誼を深めていたことと父親のテューデウスがテーバイとの戦争で死んだことを語り合い、武器を交換している。『オデュッセイア』では、第六歌一九六から一九七行でナウシカアーがオデュッセウスに対して「私は心広きアルキノオスの娘であり、パイエーケース人から彼の力は与えられている(εἰμι δ' ἐγὼ θυγάτηρ μεγάλυτορος Ἀλκινόοιο/ τοῦ δ' ἐκ Φαιήκων ἔχεται κάρτος τε βίη τε)」と述べている。
- (30) Jones, 1988, p.497.
- (31) De Jong, 2001, p.28 *Od.* 1. 214-220.
- (32) *Od.* 1. 236ff.
- (33) *Od.* 1. 251.
- (34) 安村、2007、p.26。
- (35) Kirk, 1985, p.68, *Il.* 1. 148-71.
- (36) *Il.* 1. 149. ἀναιδείην ἐπιεμένε κερδαλέοφρον. なお κερδαλέοφρον の訳について、Kirk(1985)によれば「強欲な(avaricious)」よりもむしろ「ずる賢い(crafty)」とするのが適切である。
- (37) *Il.* 1. 158. ὦ μέγ' ἀναιδὲς
- (38) *Il.* 1. 159. κυνῶπα
- (39) Sale, 1963, p.4.
- (40) 岡、1988 年、p.66f。
- (41) *Il.* 1. 205. ἦς ὑπεροπλήσι τάχ' ἂν ποτε θυμὸν ὀλέσσει.
- (42) 岡、1988 年、p.58。
- (43) *Il.* 1. 207ff.
- (44) *Il.* 1. 225. οἶνοβαρές, κυνὸς ὄμματ' ἔχων, κραδίην δ' ἐλάφοιο
- (45) *Il.* 1. 226ff.
- (46) *Il.* 1. 234ff.
- (47) *Il.* 1. 1ff.
- (48) *Il.* 1. 6f. ἐξ οὗ δὴ τὰ πρῶτα διαστήτην ἐρίσαντε/ Ἀτρεΐδης τε ἄναξ ἀνδρῶν καὶ δῖος Ἀχίλλεύς.
- (49) 岡、1988 年、p.59。
- (50) *Od.* 18. 266. (前略)σοὶ δ' ἐνθάδε πάντα μελόντων.

- (51) *Od.* 1. 360. ἡ μὲν θαμβήσασα πάλιν οἰκόνδε βεβήκε.
- (52) *Od.* 1. 374f. (前掲) ἄλλας δ' ἄλεγύνετε δαΐτας/ ὑμὰ κτήματ' ἔδοντες, ἀμειβόμενοι κατὰ οἴκους.
- (53) *Od.* 1. 381f. οἱ δ' ἄρα πάντες ὁδᾶς ἐν χεῖλεσι φύντες/ Τηλέμαχον θαύμαζον, ὃ θαρσαλέως ἀγόρευε.
- (54) West, 1988, p.121 *Od.* 1. 381-2., Russo, 1992, p.73, *Od.* 18. 410.
- (55) *Od.* 1. 384f.
- (56) Jones, 1991, p.131, *Od.* 1. 382.
- (57) *Od.* 1. 413ff.
- (58) West, 1988, p.123, *Od.* 1. 396.
- (59) De Jong, 2001, p.41, *Od.* 1. 413-21.
- (60) Kirk, 1962, p.359.
- (61) *Il.* 4. 365ff.
- (62) Griffin, 1980, p.74.
- (63) Griffin, 1980, p.74.
- (64) West, 1988, p.131, *Od.* 2. 37.
- (65) *Od.* 2. 62. ἦ τ' ἂν ἀμυναίμην, εἴ μοι δύνάμεις γε παρείη.
- (66) 例えば第一七歌三九六行以下で、求婚者の一人であるアンティノオスが乞食に身をやつしたオデュッセウスを追い出そうとしたとき、テーレマコスはその場にいる者たちに命じている。また第二〇歌二六二行以下で、テーレマコスはオデュッセウスを求婚者たちが脅かすことを固く禁じている。これに対し求婚者たちは唇を噛んで驚き、アンティノオスは彼の発言は彼らを脅かすものである(χαλεπόν)と感じている。
- (67) *Od.* 2. 63ff.
- (68) *Od.* 2. 80f.
- (69) Kirk, 1985, p.78, *Il.* 1. 245-6.
- (70) Usener, 1990, p.12.
- (71) 安村、2007、p.26。